

Ⅱ. 成果報告会

戦略的研究基盤形成支援事業 評価委員会

平成 28 年 3 月 11 日（金） 10：00 ～ 12：00

場所：神戸常盤大学 ワイガヤラボ

次 第

1. 開会の挨拶 (事務局長 坂本 啓)
2. 配付資料確認、出席者紹介等
3. 事業実施大学挨拶 (学長 上田 國寛)
4. 成果報告 ※質疑応答含む (研究代表者 坂本 秀生他)
(医療検査学科、看護学科、こども教育学科)
5. 機器見学 (研究代表者 坂本 秀生他)
6. 事業に関する意見、評価等 (評価委員)
7. 閉会の挨拶 (副学長 松田 正文)

以上

平成25～27年度
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

災害対応を組み込んだ機動的サポート システム(神戸常盤モデル)の構築

神戸常盤大学保健科学部
医療検査学科 坂本秀生

この研究のこれまで

- これまでに本学では移動型健康管理
Mobile Health Check (MHC) システムを
構築し、健康管理の意識向上につなげ
る成果を挙げた。
- MHCを元にした災害時の健康チェック構
想は、東日本大震災被災地での臨床検
査支援活動にて生かすことが出来た。

被災地での使用例



POCT(ピーオーシーティー)

- Point of Care Testing
 - ーポイント オブ ケア テスティング
 - ー臨床現場即時検査



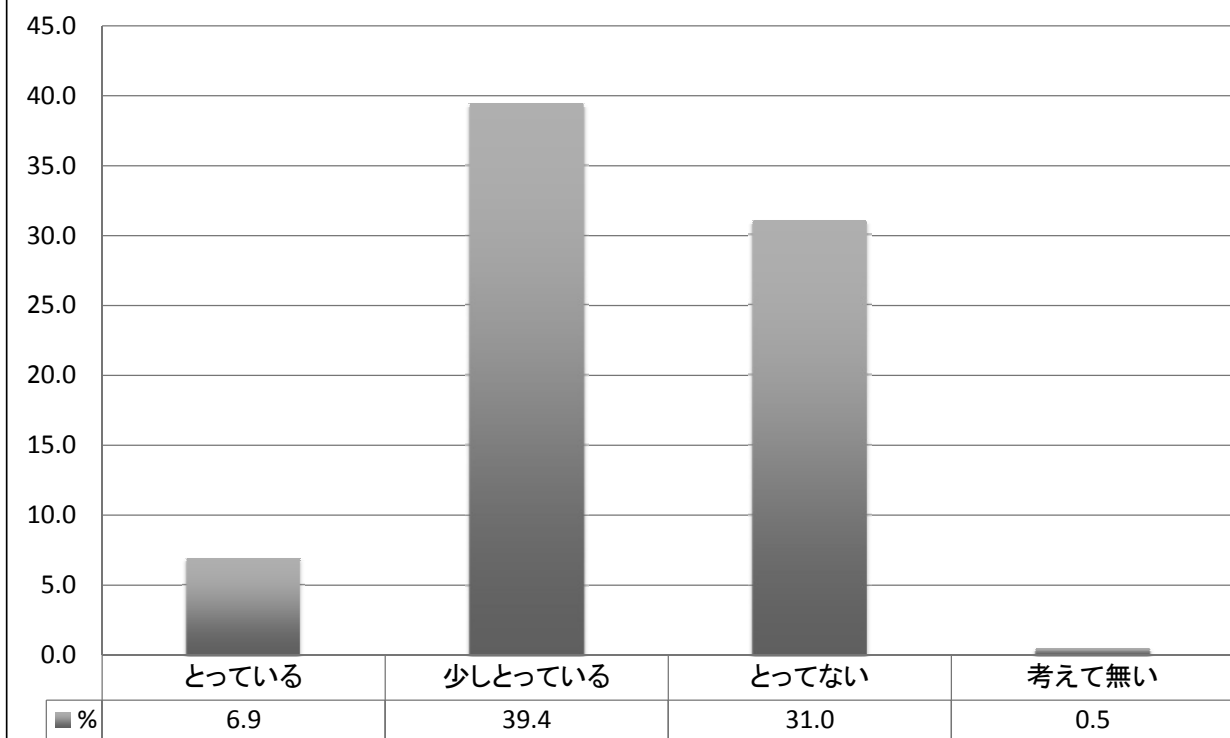
世界保健機関(WHO)憲章 による健康の定義

- Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.
- 健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。
－ 日本WHO協会より

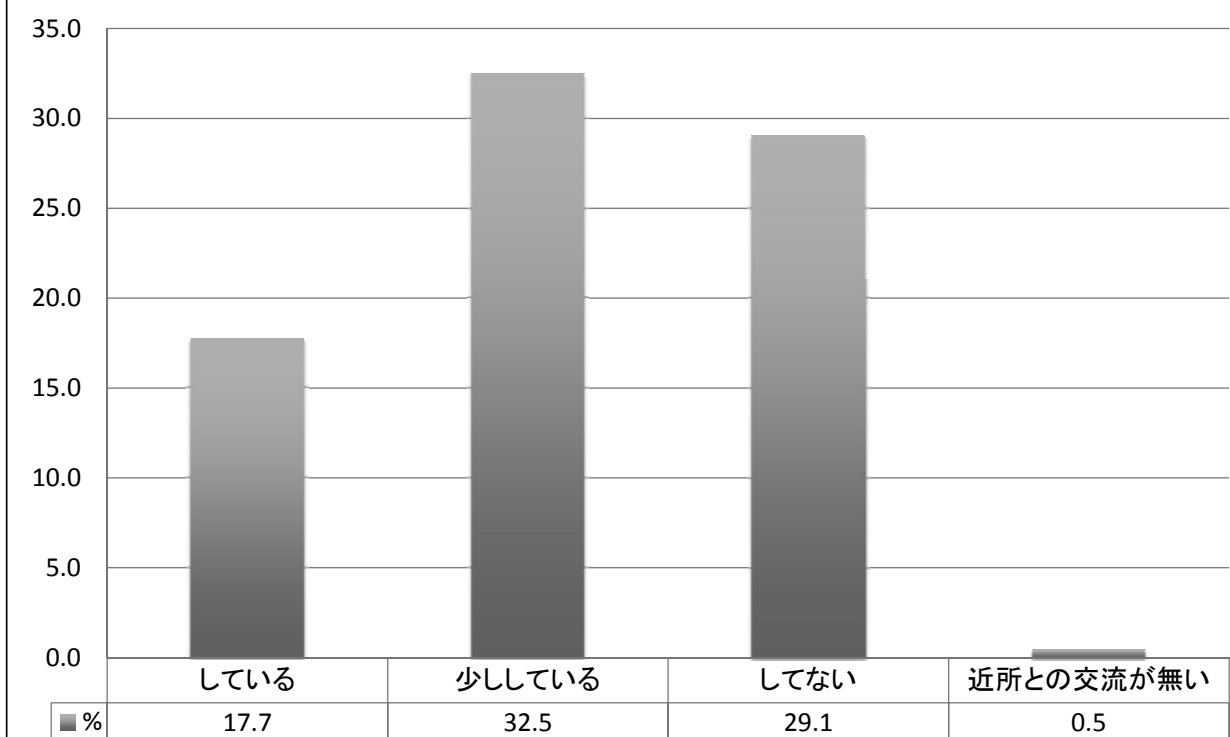
研究に至る背景

- MHCによる肉体的な健康のバロメータだけでなく、子どもと保護者を対象にした危機対応プログラムを構築し、災害等の危機発生時でも、総合的な健康維持方法を示すことが可能ではないかと、本研究申請に至った。

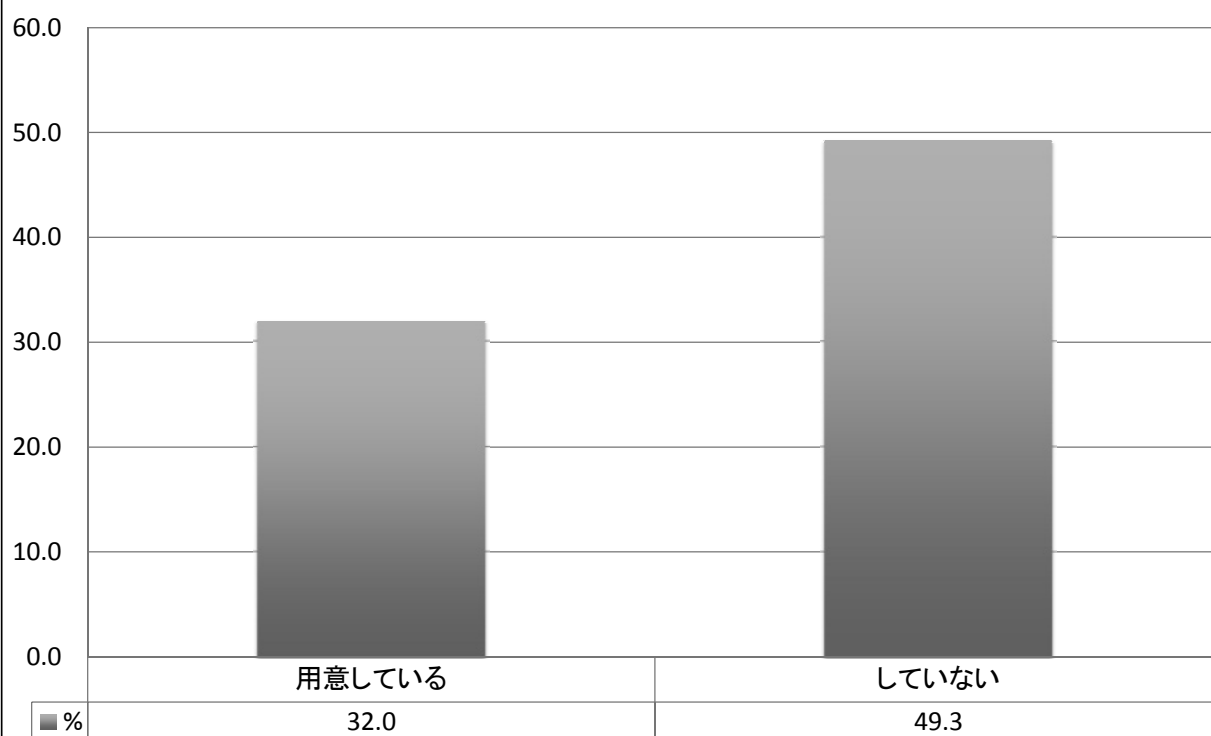
防災対策を行っているか



災害時連絡手段の準備



非常時の持ち出し品の準備



計画の概要

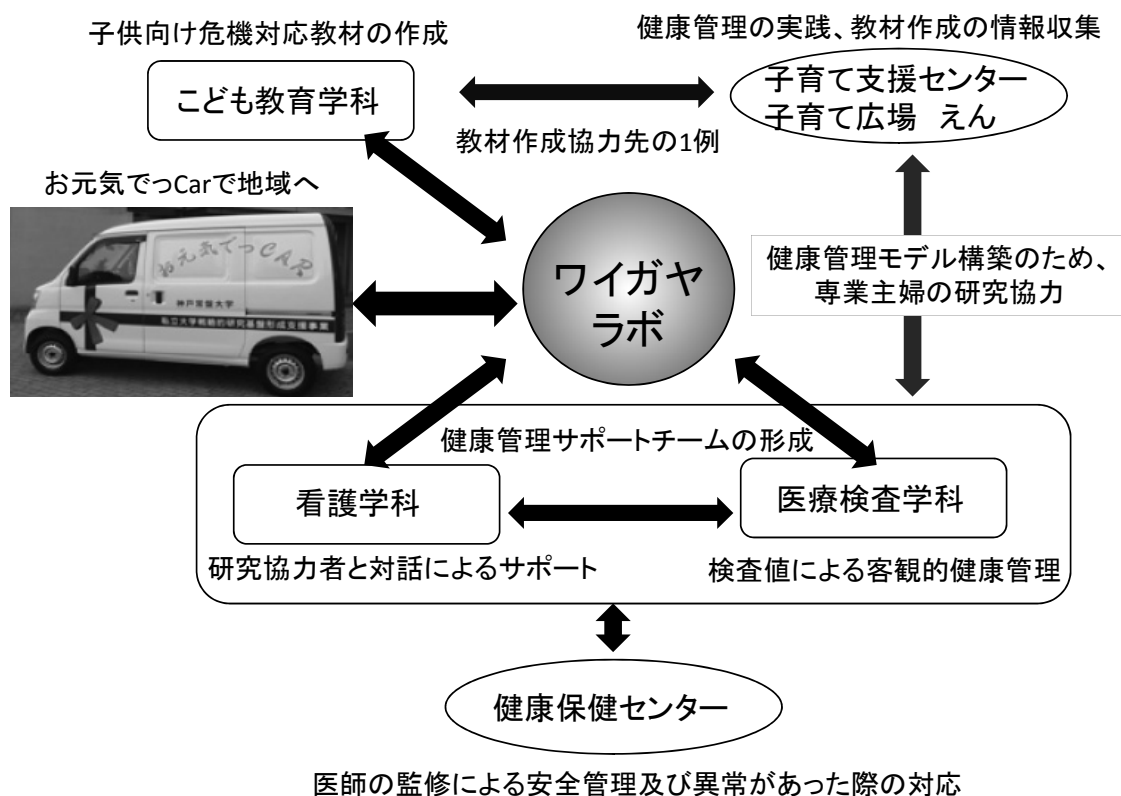
- ・危機対応マニュアルの作成だけを目的にせず、その普及及び啓蒙活動を行いながら、地域の健康管理モデルを作る。

神戸常盤モデル

神戸常盤モデルが目指すこと

- 保健科学部の研究者が健康に関するサポート体制を構築し、教育学部の研究者がこどもと保護者を対象の危機対応プログラムを構築する。
- 平時から「もしも」に備えた体制づくり、もしくは対処法を考慮して活動し、健康チェックのシステムを確立する。そのノウハウを活かして災害時は地域住民の健康をサポートする。

研究体制



お元気でっCarの作成

MHCに機動性と検査用機器、自転車を搭載



子育て支援センター「子育て広場 えん」 での実施風景



研究の実施

- 研究についての説明
- 特に指先から自己採血（指頭採血）による検査を行う場合には、同意書への署名が必須
- 待ち時間を利用してアンケートへの協力
- 検査結果と基準値の返却
- 検査値と共に助言

研究協力を頂くにあたって

研究協力者用同意説明書

協力いただく皆様へ

「災害対応を組み込んだ機動的サポートシステム（神戸常盤モデル）の構築」に関する研究の説明書

神戸常盤大学保健科学部では看護領域と臨床検査領域において実践的な職業人を輩出すべく、常に努力しております。充実した教育を行うためには教育者である教員が自ら研究を行い、現実に即しながらも最新の知識や技術を得るだけでなく地域社会にも貢献することが大切です。

この主旨に基づき申請した研究が平成25年度の文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、研究を三年間行なえることとなりました。この研究を遂行するには研究協力者として、皆様方のご意見とご協力が不可欠です。

この文は研究への協力についての説明文です。本研究について説明いたしますので、内容を十分に理解されたうえで、協力するかどうかご自身の意思でお決めください。また、ご不明の点などがありましたら遠慮なくご質問ください。

研究協力者としてご同意を頂けるようでしたら、5ページと6ページの同意書にご自身でご記入頂き、5ページの同意書をご自身で保存して頂き、6ページは神戸常盤大学で保存させていただきます。

研究実施責任者及び連絡先
〒653-0838
神戸市長田区大谷町 2-6-2
神戸常盤大学保健科学部 医療検査学科
教授 坂本 秀生
連絡先 大学代表電話：078-611-1821
担当者直通電話：078-940-2477
電子メール：h-sakamoto@kobe-tokai.ac.jp

- 1 -

1. 研究概要

本研究は、機動的な健康管理形態を構築し、地域医療の補完的な役割を目指すだけでなく、災害が起った際の対応を含めた効果的な防災教育の構築も目指します。具体的に、平時は健康管理と防災、災害時は機動的性を活かした支援体制の構築を目指します。

研究の一部では看護師が健康に関する調査を行なって健康支援活動を行い、臨床検査技師が迅速分析装置を用いて生体試料の分析を行い、健康増進に寄与しようとする研究です。一般的な健診では検査結果が後日送付され、印刷された情報を読む、一方通行の状態です。本研究では看護師と臨床検査技師が同行し、その場で検査結果を提示して対面しながら、双方向型の健康管理としての試みです。また、自動血圧計、体脂肪測定、ヘモグロビン量などの測定では研究協力者にカードをお渡し、前回の値と比較することも可能です。

2. 研究目的

本研究は日頃から健康管理を通して予防に寄与することを目的として活動し、これらのことが災害発生時でも実践できるよう、平時の健康管理に加えて危機対応プログラムの構築も目的とします。

研究だけに留まらず、地域の方と話し合いの場を設けて皆様との連携を深め、住民と大学、医療機関および行政との間に、健康と安全を合い言葉にした有用で現実的な信頼関係の構築を目指しています。

3. 研究方法

1) 対象者

神戸市長田区及び近郊にお住まいの方

2) 調査項目

健康状態や生活習慣のアンケート、看護師や臨床検査技師が出向いて対面しながら行う検査に関する内容、災害時への利用法研究への参考にするためのアンケートへの回答をして頂きます。

健康管理の指標として、自動血圧計、体脂肪測定、ヘモグロビン量などの測定を機械で行って頂きます。また、希望者には微量の自己採血をして頂き、血液中の幾つかの成分を測定させて頂きます。測定項目は、別紙に示したその場で検査結果を判明することが出来る項目の中から一度の微量採血で検査出来る項目です。

4. 協力予定期間

神戸常盤大学研究倫理委員会承認年月日から平成28年3月31日にかけて行います。

- 2 -

研究協力を頂くにあたって

5. 研究期間中及び終了後の面接調査結果の取扱いの方針について

得られた個人情報ならびにデータなどは、鍵のかかる場所で保管し管理いたします。個人情報とは、本研究以外の目的で利用できません。また、研究終了後は、速やかに全てのデータを焼却処分または無効化し、電子データについては消去いたします。

6. 予想される研究上の利益（効果）及び不利益（副作用など）について

この研究は受益者の利便性を増す方法で確立できる利益があります。不利益として考えられることは、研究協力による時間的拘束、微量採血とは言え自己採血による痛みがストレスとなること、小さな針を刺すことによる危険性です。

7. 自由意思による協力について

この研究に協力するかは、あなたの自由な意思でお決めください。たとえ研究への協力をお断りになっても、不利益を受けることはありません。

8. 同意撤回の自由について

研究に協力することに同意された後でも、いつでも研究協力をやめることができます。その場合でも、不利益を受けることはありません。ただし、その場合は担当者にご連絡ください。これは、あなたのプライバシーの保護及び健康管理に万全を期するためです。

9. 新しい重大な情報が得られた場合は速やかにお知らせします

新しい情報が得られることにより、あなたが研究協力をやめようという判断も考えられます。この研究に関する新しい重大な情報（研究の安全性など）が得られた場合、速やかに内容をお伝えし、研究への協力を続けるか、自由意思で決めていただけます。

10. 研究への協力を中止していただく場合の条件について

この研究への協力中止を希望された場合だけでなく、研究実施中にストレスなど好ましくない症状などがおこり、研究を中止すべきと担当者が判断した場合、理由を説明して研究への協力を中止していただく場合がありますのでご了承ください。

11. 協力した方のプライバシー保護について

研究者があなたに面接調査をする場合、他者に聞かれないように配慮します。研究に協力する研究者があなたからの面接調査で得た内容を知る必要がある場合、あなたの個人情報が特定できないようにして閲覧します。個人情報とは、本研究以外の目的で使用することは一切ありません。

- 3 -

12. 研究成果の公表

研究成果は学術目的のために公表することがありますが、この同意書で同意を頂いたこととなります。その際、個人情報は厳重に守り、第三者に絶対にわたらないようにします。

13. 知的財産権の帰属について

この研究から生じる特許権等の知的財産権は、神戸常盤大学及び研究者に帰属します。

14. 費用負担に関する内容

協力者の費用負担はありません。この研究に協力していただいても謝礼はありません。

15. 研究計画書等の開示について

この研究の実施計画書の閲覧を希望される方は遠慮なくお申し出ください。

16. 研究結果の開示について

この研究において得られた結果について、ご希望があれば開示いたします。

17. 研究実施責任者の氏名、職名及び連絡先

坂本 秀生
〒653-0838 神戸市長田区大谷町 2-6-2
神戸常盤大学 保健科学部 医療検査学科 教授
連絡先 大学代表電話：078-611-1821、担当者直通：078-940-2477
電子メール：h-sakamoto@kobe-tokai.ac.jp

- 4 -

研究協力を頂くにあたって

同意書

研究協力者保存用

研究責任者：(所属名) 神戸常盤大学保健科学部 医療検査学科 坂本秀生 殿

研究課題名：看護講師と臨床検査技師の合同チームによる移動型健康管理 Mobile Health Check (MHC) システムの構築

説明を受け理解した項目 (□の中に自分でチェックを付けて下さい。)

- | | |
|----------------------------------|---------------------|
| 1. □研究概要 | 8. □同意撤回の自由 |
| 2. □研究目的 | 9. □新しい重大な情報の開示 |
| 3. □研究方法 | 10. □研究への協力が中止となる条件 |
| □面接内容の録音の同意 | 11. □プライバシーの保護 |
| □微量自己採血の同意 | 12. □研究成果の公表 |
| 4. □協力予定期間 | 13. □知的財産権の帰属 |
| 5. □研究期間中及び終了後の面接調査結果の取扱いの方針 | 14. □費用負担に関する事項 |
| 6. □予想される臨床上の利益 (効果) 及び不利益 (副作用) | 15. □謝礼の有無 |
| 7. □自由意思による協力 | 16. □研究計画書等の開示 |
| | 17. □研究結果の開示 |
| | 18. □研究責任者の連絡先 |

この欄は協力者ご自身でご記入ください

以上の説明についてよく理解しましたので、本研究の実施に同意します。

平成 年 月 日

協力者氏名 _____ 白署

住 所 _____

説明者記入欄

施設名： 神戸常盤大学保健科学部 _____

説明者氏名 (白署)： _____

説明した日： 平成 年 月 日

注意：協力者保存用同意書は協力者に手渡してください。大学保存用同意書は研究担当者が保管してください。

研究協力者保存用

同意書

研究責任者：(所属名) 神戸常盤大学保健科学部 医療検査学科 坂本秀生 殿

研究課題名：看護講師と臨床検査技師の合同チームによる移動型健康管理 Mobile Health Check (MHC) システムの構築

説明を受け理解した項目 (□の中に自分でチェックを付けて下さい。)

- | | |
|----------------------------------|---------------------|
| 1. □研究概要 | 8. □同意撤回の自由 |
| 2. □研究目的 | 9. □新しい重大な情報の開示 |
| 3. □研究方法 | 10. □研究への協力が中止となる条件 |
| □アンケート回答の同意 | 11. □プライバシーの保護 |
| □微量自己採血の同意 | 12. □研究成果の公表 |
| 4. □協力予定期間 | 13. □知的財産権の帰属 |
| 5. □研究期間中及び終了後の面接調査結果の取扱いの方針 | 14. □費用負担に関する事項 |
| 6. □予想される臨床上の利益 (効果) 及び不利益 (副作用) | 15. □謝礼の有無 |
| 7. □自由意思による協力 | 16. □研究計画書等の開示 |
| | 17. □研究結果の開示 |
| | 18. □研究責任者の連絡先 |

この欄は協力者ご自身でご記入ください

以上の説明についてよく理解しましたので、本研究の実施に同意します。

平成 年 月 日

協力者氏名 _____ 白署

住 所 _____

説明者記入欄

施設名： 神戸常盤大学保健科学部 _____

説明者氏名 (白署)： _____

説明した日： 平成 年 月 日

注意：協力者保存用同意書は協力者に手渡してください。大学保存用同意書は研究担当者が保管してください。

- 5 -

- 6 -





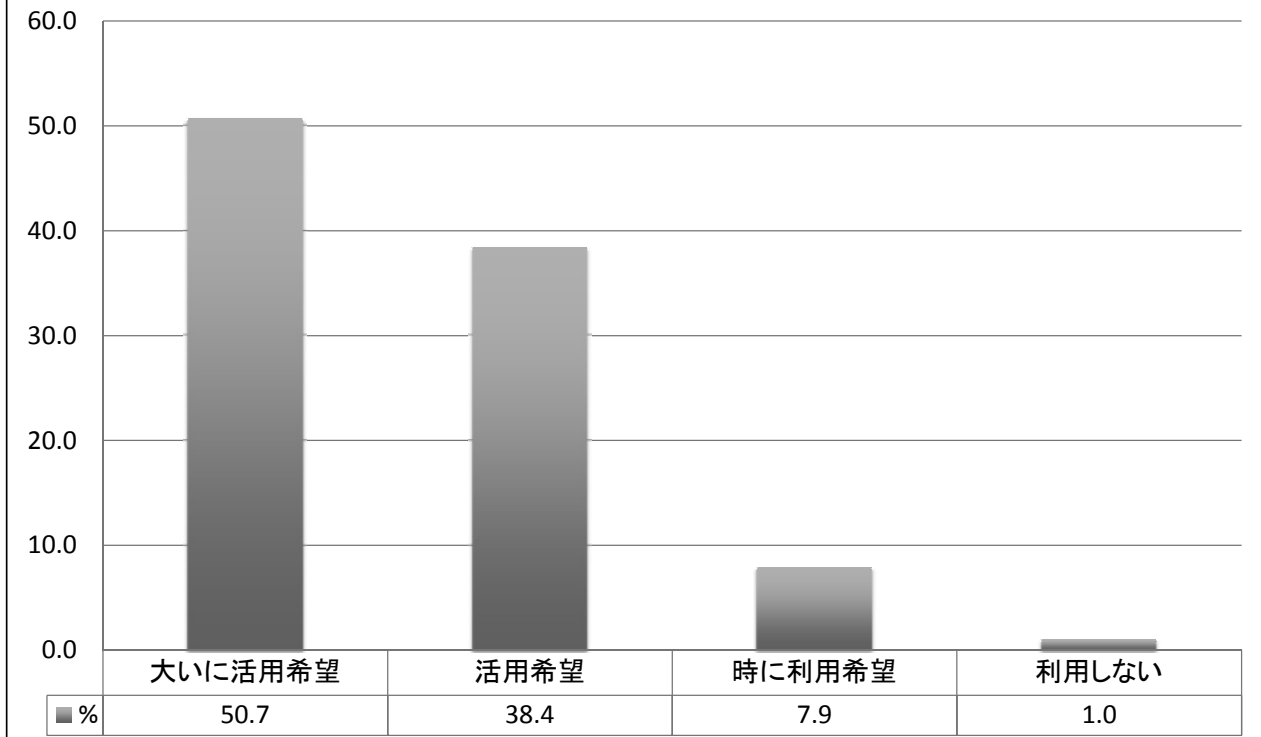
記述調査対象者の概要

	男性	女性	無記名	合計
回答数	44 名	149 名	10名	203名
平均年齢	63.5歳	58.8歳	61.4歳	61.4 歳

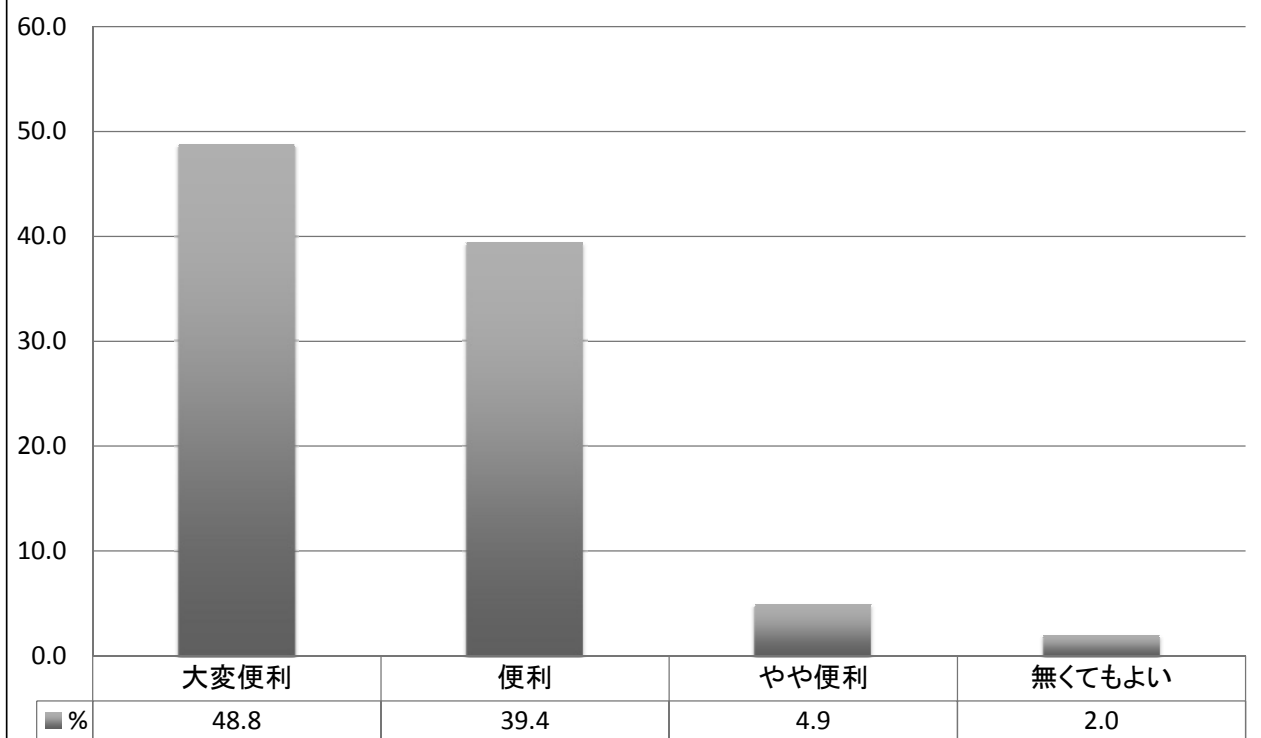
職業の有無

有	無	合計
39名	164名	203名
19.2%	80.8%	100%

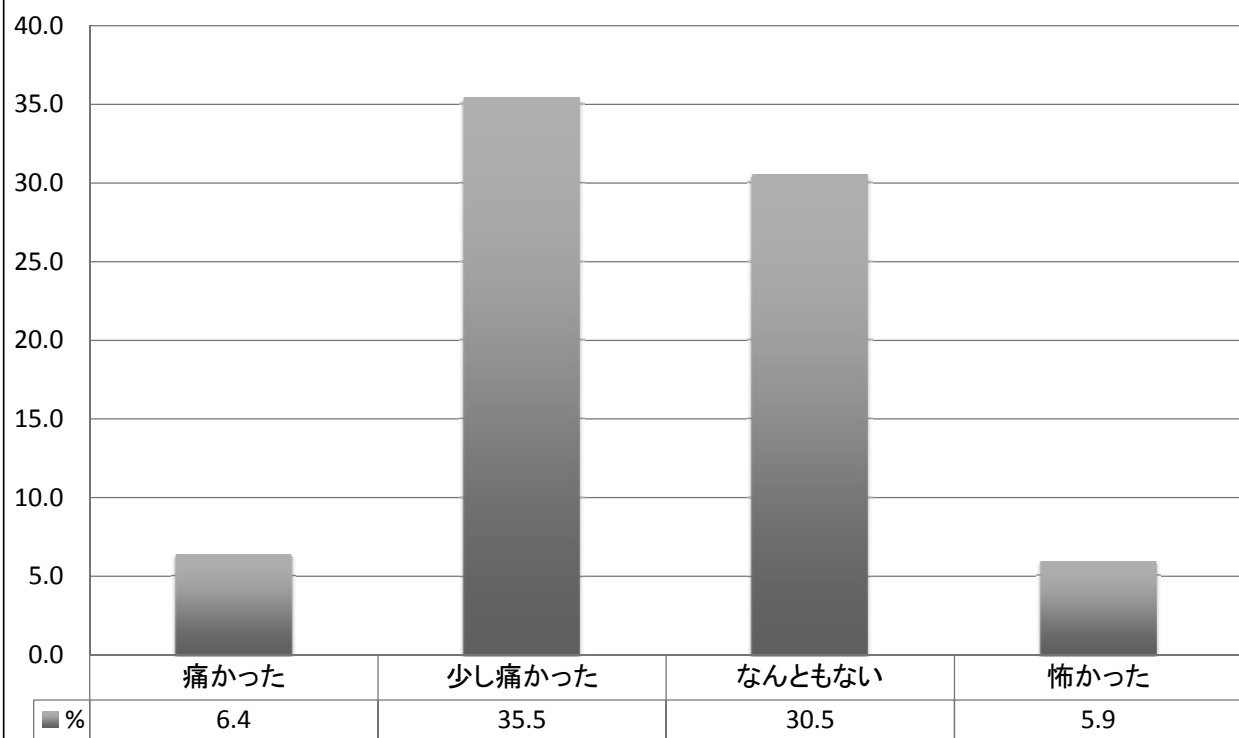
自己管理用検査への印象



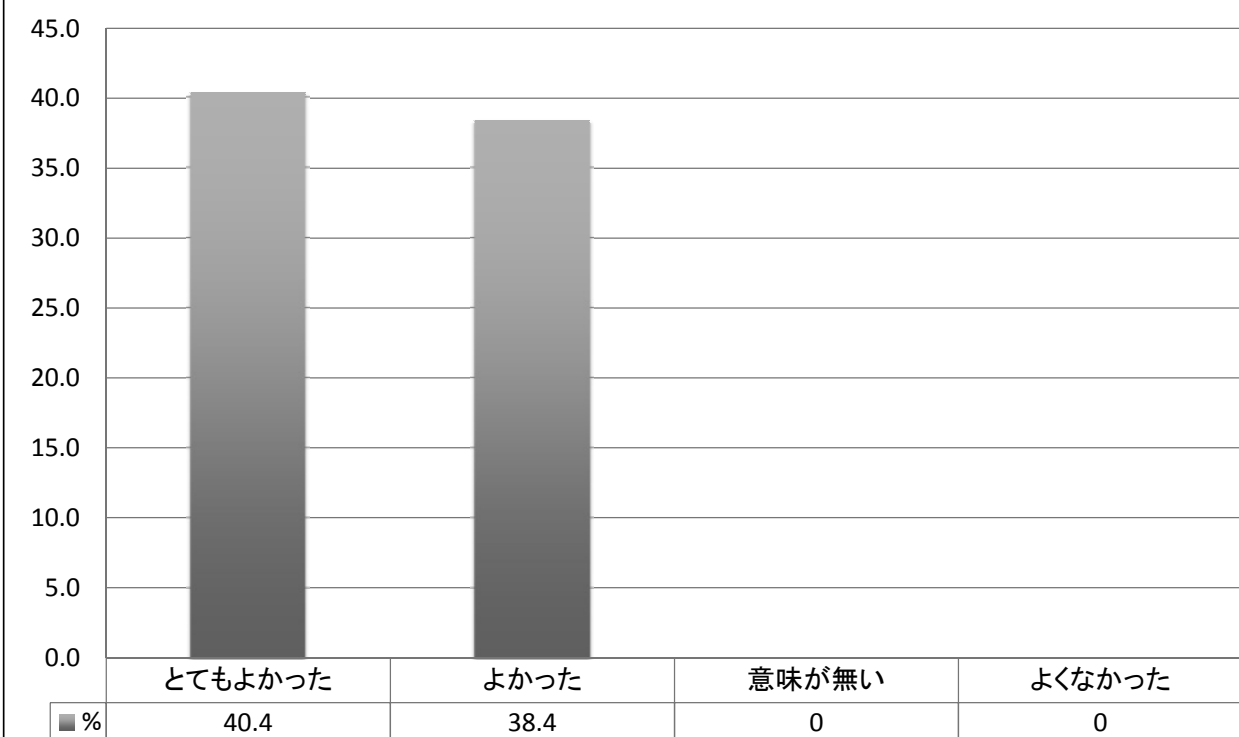
検査する側が出向く検査



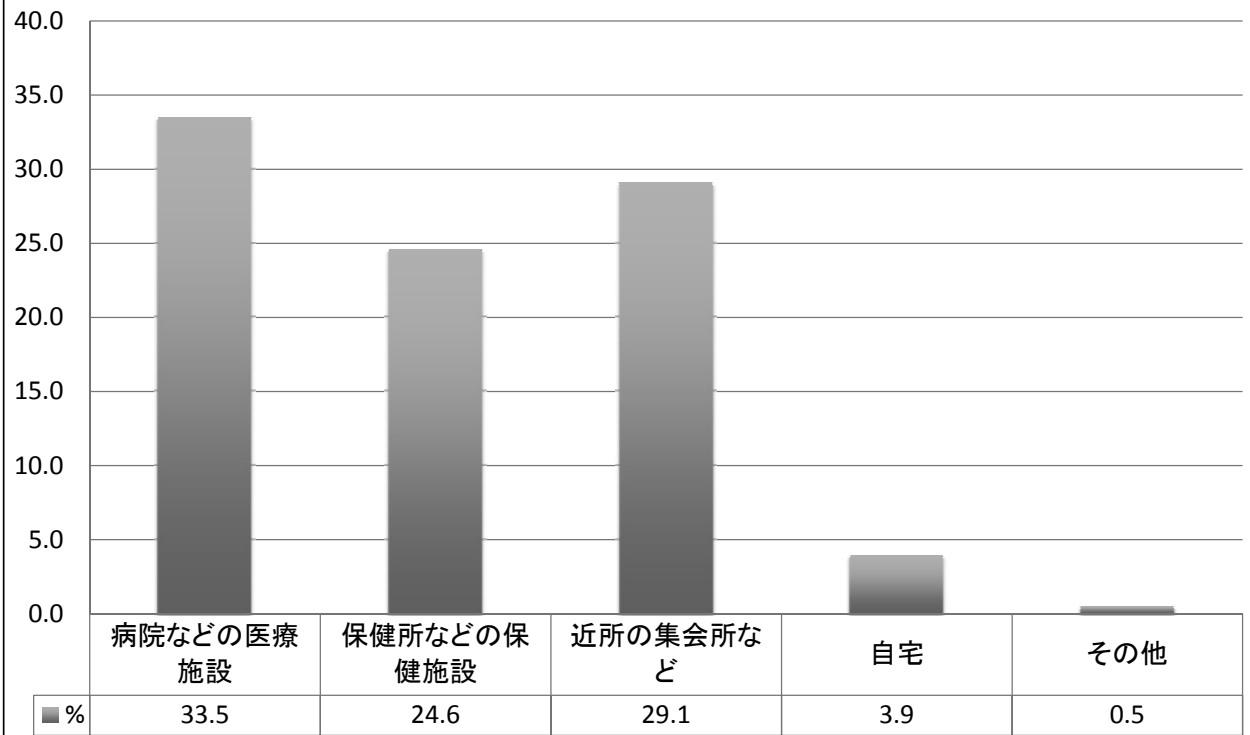
微量採血への感想



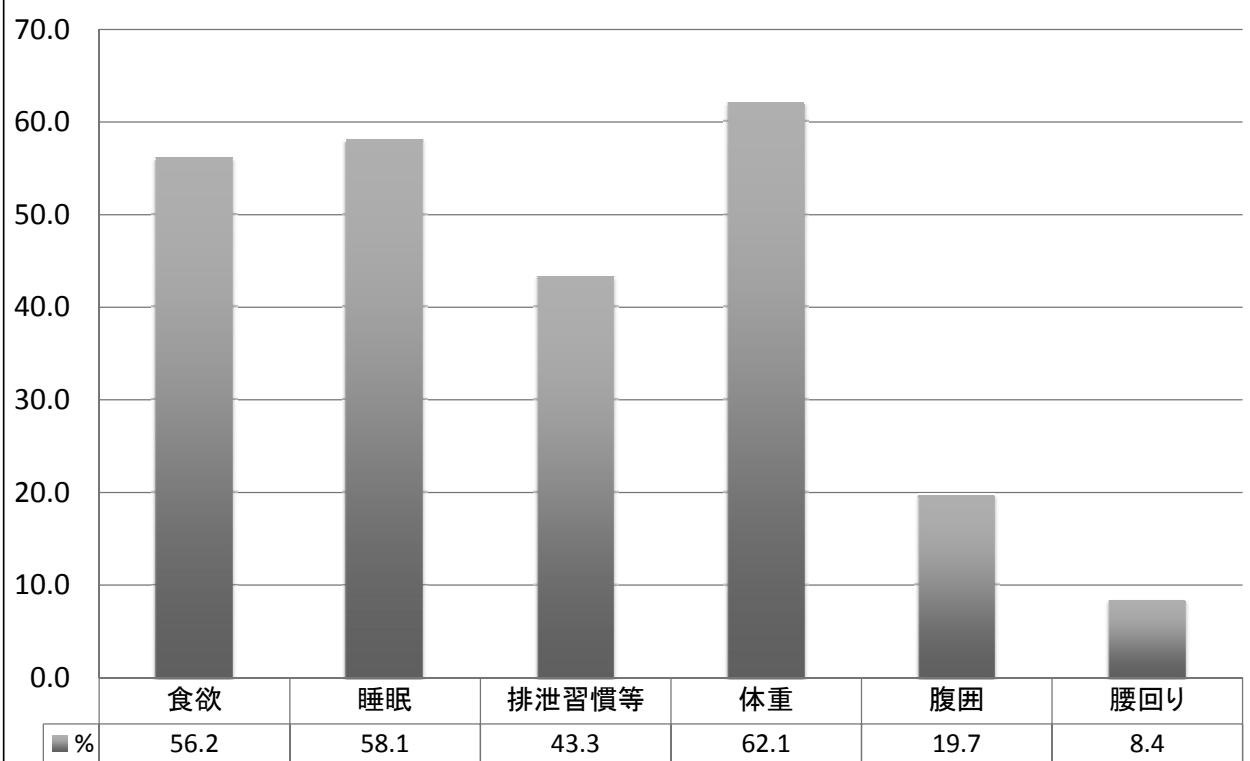
検査の意味をその場で聞ける意義



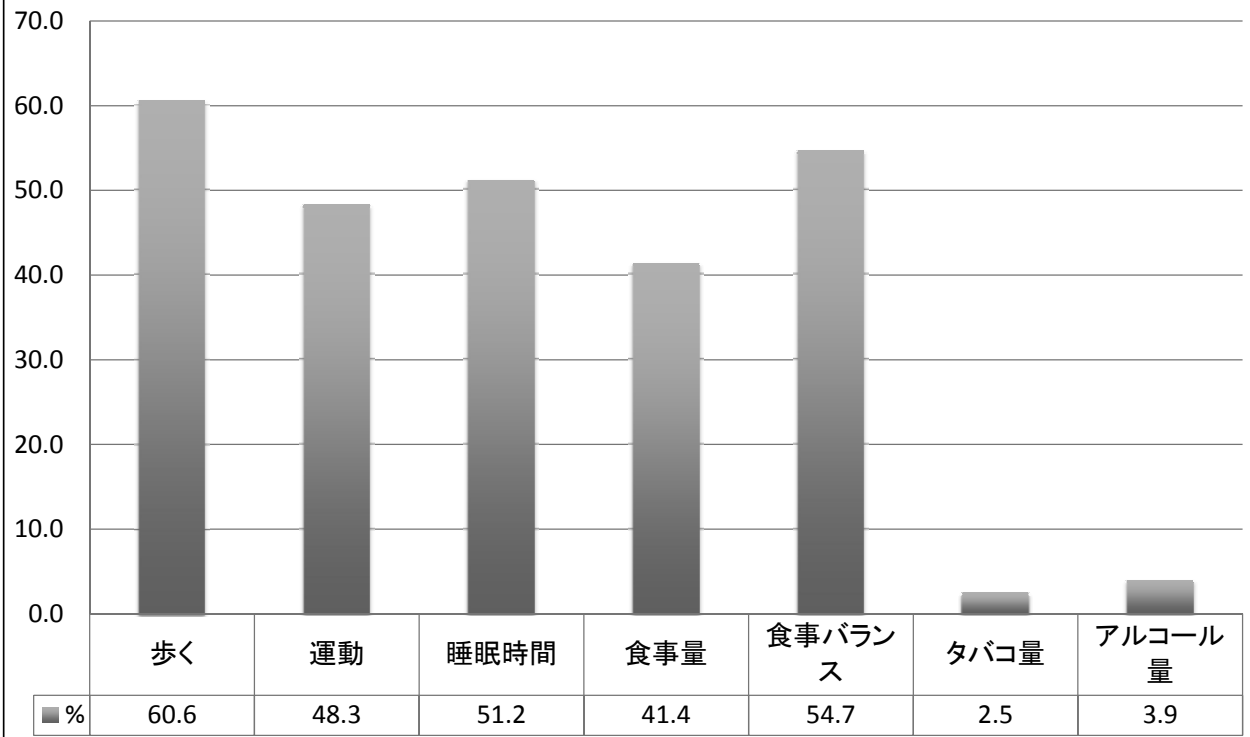
検査や相談を行う場所



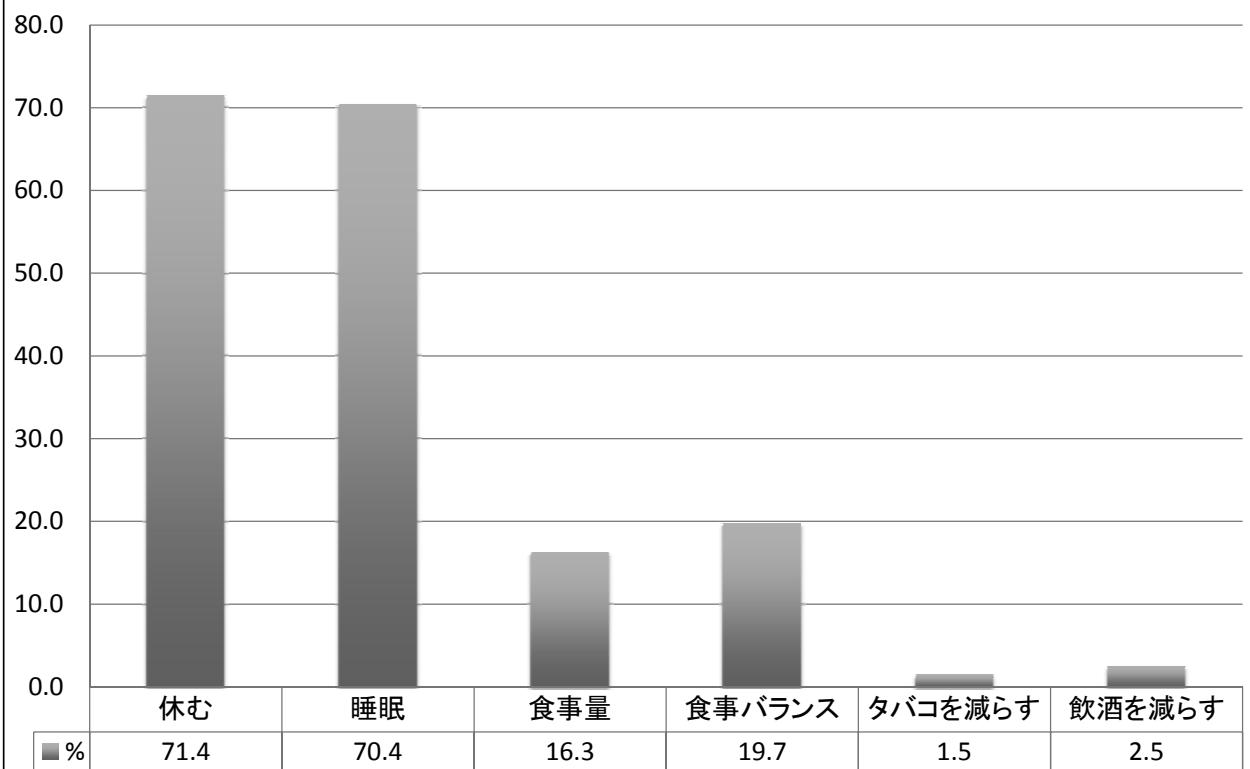
健康の目安



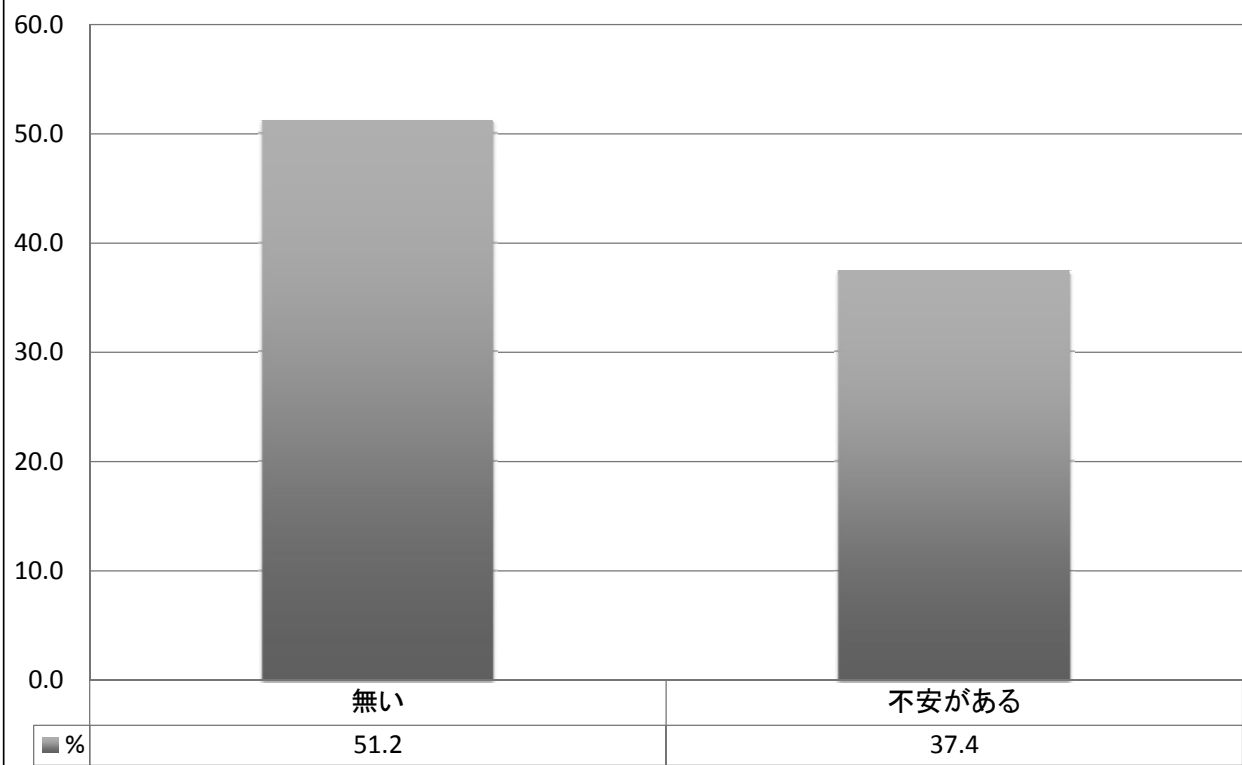
健康維持の心がけ



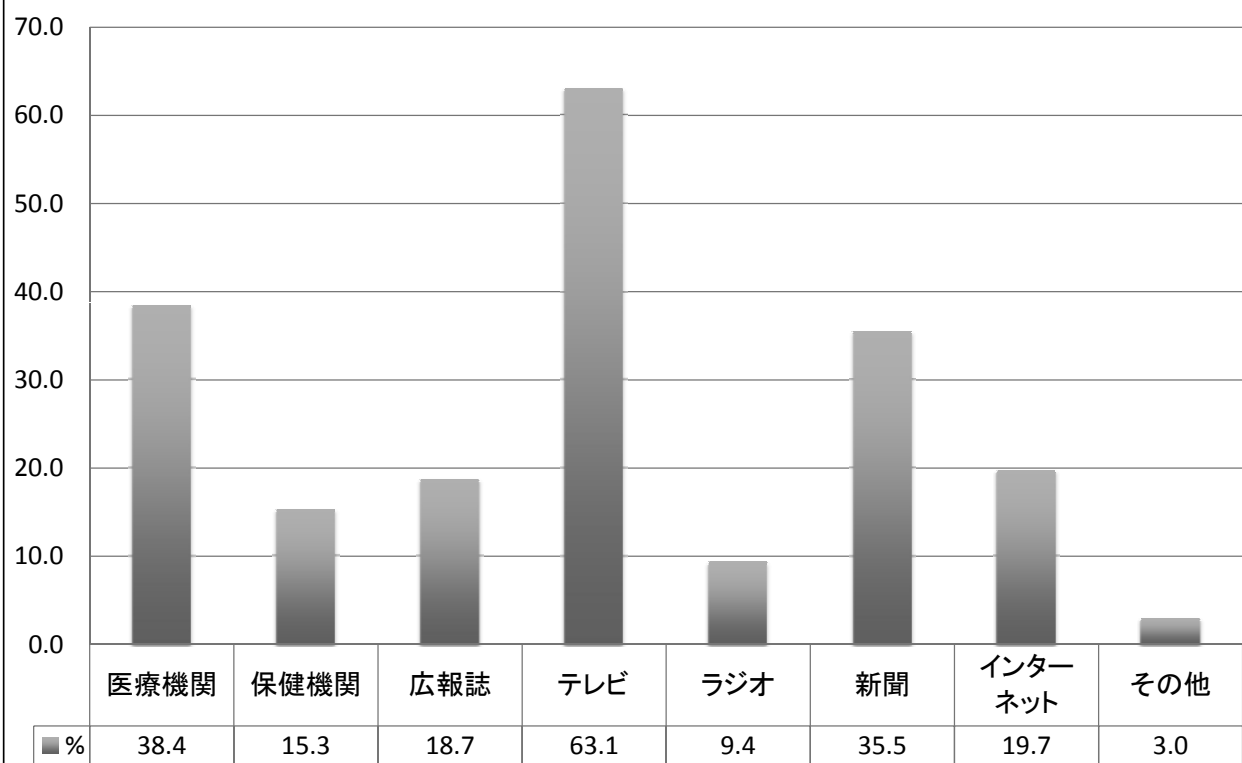
体調が悪いときの対処



健康面についての不安



健康情報の入手



健康面について

- 多くの方が体重や睡眠、食欲を健康の目安としている
- 目 安
 - － 体重 62.1%、睡眠 58.1%、食欲56.2%
- 維 持
 - － 歩く 60.6%、食事 54.7%、睡眠 51.2%
- 不良時
 - － 休む 71.4%、睡眠 70.4%
- 入手法
 - － テレビ 63.1%、医療機関 38.4%、新聞 35.5%

病院外での検査について

- 検査場所
 - － 健康診断 53.7 %、未受診53.7 %
- 自己管理検査の利用
 - － 大いに希望 50.7%、希望 38.4%、時には 7.9%
- 検査側が出向く
 - － 大変便利 48.8%、便利 39.4%、
- 微量採血への感想
 - － 少し痛かった 35.5%、何ともない 30.5%

検査について

- 検査の意味をその場で聞ける意義
 - とてもよかった 40.4.7 %、よかった 38.4 %
- 検査や相談を行う場所に適した場所
 - 医療施設 33.5%、集会所等 29.1%、保健所 24.6%
- 検査を行う間隔
 - 半年 40.4%、1年 34.5%
- 災害後に治療を再開した時期
 - 1週間 4.9%、1ヶ月4.9%、1～3日4.9%、

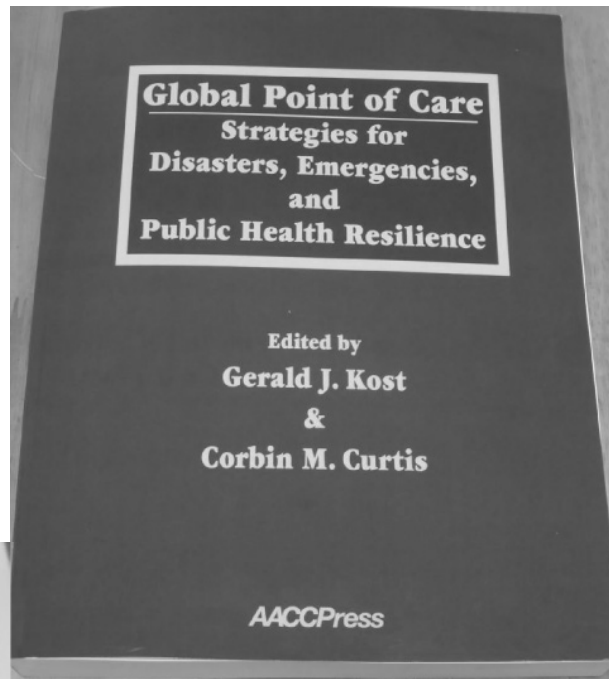
計画の概要

- 3学科の特色を生かし、平時には健康管理を通じた地域医療の補完的役割の構築を兼ねながら、調査研究を通じて危機対応モデル構築が可能である。
- コアとなるのは「お元気でっCar」であり、平時は健康チェックを行いながら防災減災教育の開発を行い、災害時には効果的な全人的な健康支援の提供を目指す。

研究成果の公表

- 研究代表者の坂本は、本研究のベースとなる災害時の臨床検査支援、被災後の健康管理の実践について国際的に評価を受け、分担著者として英文書籍を出版し

Hideo Sakamoto, PhD
Chair
Great East Japan Earthquake Support Committee
Japanese Society of Laboratory Medicine
and Professor
Department of Medical Technology
Kobe Tokiwa University
Kobe, Hyogo
Japan
Chapter 40



研究成果の公表

- 2015年11月にメキシコで開催された国際臨床化学会(IFCC)にてシンポジストとして招待され、「お元気でっCar」にも搭載している「小型生体試料分析装置」を利用した災害後の健康管理支援の行い方について、研究成果の一部につき講演を行った



15:30 - 16:00 PoCT is useful for laboratory medicine
Hideo Sakamoto

研究成果の公表

- ・ 地域医療，災害医療で活躍する臨床検査として臨床検査専門雑誌の新年特集号に取り上げられ

た

臨床検査

2016年01月号 (通常号) (Vol.60 No.1)

今月の特集1 社会に貢献する臨床検査／今月の特集2 グローバル化時代の耐性菌感染症

■今月の特集1 社会に貢献する臨床検査
臨床検査の進むべき道

臨床検査技師の社会貢献 日常業務・対外活動を通じて

臨床検査専門医の社会貢献 求められる専門医像

地域医療，災害医療で活躍する臨床検査

村田 満

宮島 喜文

佐守 友博

坂本 秀生



阪神・淡路大震災 復興のつどい
～大震災から20年 未来へのメッセージ～

2014年12月20日(土) 10:00～

神戸常盤大学 メインホール

神戸市長田区大谷町2-6-2



明らかになった問題点

- 本プロジェクトでは研究協力との形であり、人件費や試薬を含めて無料で管理が可能であった。
- 研究協力者からの評価は良好であったが、それは無料で実施し、利用者への金銭的負担が無かったこと点が理由である可能性がある。
- 実社会でこのシステムを運用する際には初期投資として機器類の購入費用、検査試薬代金、人件費を含めた予算が必要となる点が問題点と予想される。

問題点の克服

- 金銭的問題点を克服するため、公的な補助の仕組みを構築できると理想。
- 公的な仕組みで行う際には、小型の検査機器を用いず、採血を行える医療従事者が訪問し、採血を行い専門医療機関で検査を実施することとも代案としては可能。

本研究から期待される効果

- 平時より「もしも」に備えた体制づくり、または対処法を考慮し、実践でも効果的に活動が行え、危機対応能力を保つことが期待できる。
- 「お元気でっCar」の作製により、災害時での医療サポートが期待できる。その際に災害看護のスペシャリストも加わり、こもりがちになってしまう被災高齢者に向け、健康チェックをキーワードに対人コミュニケーションを促すことが期待できる。

研究成果の副次的効果

神戸常盤大と災害協定締結

神戸市 乳幼児、妊婦対象の避難所



災害協定を締結した神戸市と学校法人「玉田学園」の代表者ら＝神戸市役所

災害発生時に乳幼児や妊婦の安全な避難場所を確保するため、神戸市は1日、看護学部のある神戸常盤大学（同市長田区）を「災害協定を締結した。市内の大学で初めて大規模な災害発生時に乳幼児や妊婦の安全な避難場所を確保する」とした。市役所は1日、看護学部のある神戸常盤大学（同市長田区）を「災害協定を締結した。市内の大学で初めて大規模な災害発生時に乳幼児や妊婦の安全な避難場所を確保する」とした。

市によると、阪神大震災や東日本大震災では、長期間避難生活を送る高齢者や乳幼児ら要援護者が健康状態を悪化させたケースが多かった。事前に協定を結ぶことで、スムーズな受け入れができるようになる。同大には乳幼児の保育器や成人用ベッド、和室などがあり、100人以上の母子の受け入れが可能。妊婦や乳幼児が比較的ゆったり過ごすことができる。また、協定には市が災害発生時に行う要援護者の健康調査や生活相談に、看護などの専門知識のある学生らが協力することなども盛り込まれた。同市役所であった締結式では、三木孝・保健福祉局長と玉田学園の中村忠司・法人本部長が協定書を交わした。

した。三木保健福祉局長は「市民が避難しても安心して過ごせるよう大学の看護、介護の専門性に期待したい」と話した。

神戸市内の大学で初の「福祉避難所」に指定。

看護学科の取組み

ヒューマンケアのプロとして

多様なヘルスケアニーズに対応する

2016.3.11

看護学科 報告者
畑 吉節未



大学全体の中で看護学科が果たす役割

確かな知識と技術、豊かな心を持つヒューマンケアのプロを目指す

- 大学全体の取組みの方向性
 - 幼児から高齢者まで、また健常者から病者までさまざまな人の「いのち」を心身両面から支えるスペシャリストの養成を目指す
- 看護学科が果たす役割を確認
 - 「ケア」と「ケアリング」を中核にした取組みを進める
 - 相手のことを尊重しながら、持っている能力を引き出したり、痛みや不安を癒したり、そして、自分自身も相手の影響を受け、お互いに成長していけるように関わる
 - どのような場合でも人々の状況を理解、対応できる姿勢を養うことを狙う
 - 人々が人間らしく健康的な生活を送る権利があるということを忘れず、人々の抱える“苦痛や苦悩”を受けとめ、理解する姿勢を培う
 - マインドとスキルを持ち合わせた専門職の育成につなぐ
 - 人の尊厳を守り、健康という側面から自己実現を助けるためのマインドとスキルを備えた専門職の育成

看護学科の報告の柱

大学全体の取組みの中で看護学科の果たす役割から

- 看護学科は、日常・非日常を通して、住民が直面する「健康の危機」への対応を適切に支援する専門職としての役割を担う
 - 日常(在宅)と非日常(避難所)の環境下での『ツール』と『場』の有効活用し、多様なヘルスケアニーズに対応するケアのあり方を考える
- 本日の報告
 - 日 常: POCTが創出する新たな在宅看護
 - 病院完結型から地域完結型医療へのシフトの中で、増加する医療依存の高い在宅療養者のヘルスケアニーズに対応する仕組みの構築に向けて
 - ポイント・オブ・ケアティスティングが創出する新たな在宅看護像—POCT導入上の課題(在宅医療学会2014)
 - 在宅療養支援診療所の活用事例にみるモバイル検査機器の有用性と課題の検討(在宅医療学会2015)
 - 非日常: 指定避難所として医療系大学に必要な環境
 - 災害時の避難所の模範的環境を設定し、住民とともに必要な環境を検討(災害看護学会2015)
 - 体育館を活用して、模擬避難所を設定し、学生 & 住民の参画をもとに、災害時を考える環境を創出(健康フェアで実施)

3

看護学科の研究プロジェクトの構成

- 鎌田学部長をトップに関係領域の教員で構成

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
鎌田 美智子	保健科学部学部長 / 教授	看護実践の果たす教育能力の開発	看護職としてのプログラム進行への助言
畑 吉節未	教授	災害教育方法の開発と評価	防災教育方法の提案と評価の開発
岩越 美恵	教授	小児科学と治療教育	小児専門医として健康面における管理
谷口 由佳	准教授	看護実践における教育方法	災害教育・地域での予防活動の実践
上野 理恵	助教	在宅看護実践方法	災害教育・地域での予防活動の実践

4

POCT (Point of Care Testing)

- ポイント・オブ・ケア・テストング (POCT) は、小型の臨床検査機器を用い、検体採取後すぐに検査を行ない、被検者への次の対応を判断する一連の行為を指し、臨床即時検査とも称されている (日本臨床検査自動化学会 2008)。
- 持ち運びの容易さ、簡易で迅速に出る検査結果等のPOCTの機能的な特性は、在宅医療における療養者の診断やモニタリングに活用することが期待されている (Price & Kricka 2007)



5

「日常：POCTが創出する新たな在宅看護」から

- POCTが創出する新たな在宅看護像 (日本在宅医療学会 2015)
 - 11名の訪問看護師にPOCTを訪問看護に導入する場合の課題をグループインタビューにより収集し、質的に分析
 - 医療依存度の高い在宅療養者にとっては、エビデンスに基づく医療と生活援助ができれば在宅での生活の質の向上と、在宅生活の持続可能性を高める
 - POCTは療養者への在宅ケアのプロセスで活用できる
 - 持続的な在宅生活を支える計画→健康状態のモニタリング→適切な判断・指示にもとづく治療等のケアの提供→モニタリングといった在宅ケアのプロセスに深く関わり、役割を果たす
 - 検査結果に基づくケア提供上のコミュニケーション課題や、モニタリングによる健康行動の変容に関わる課題への対応が必要
 - そもそも検査ニーズはどのような場合にあるのか、医療ケアに重点を置き考える

6

「日常：POCTが創出する新たな在宅看護」から

- 在宅療養支援診療所の活用事例にみるモバイル検査機器の有用性と課題（在宅医療学会2015）
 - － 4名の医師を対象に、在宅療養者に必要な検査場面とモバイル検査機器の有用性、用いる上での課題について事例収集
 - － 検査によるエビデンスが適切な治療方針の決定や、専門職間での共有に用いられ、タイムリーなケアの提供に活かせる
 - 療養者宅への訪問時に診られた健康の揺らぎを迅速・効率的に診断・治療できる ↔ 療養者の「在宅」に関する主体的選択を支える
 - 診断・治療においては、身体的な所見だけでは捉え難い疾病と要因の診断のために簡易な検査が効果を発揮
 - 検査データの蓄積と健康がゆらぐ場面を生活行動に関連づけ、二次的な合併症等を予防するモニタリングとして活用できる
 - － 課題としては、検査データだけで療養者を見ずに全体的に捉える危険性、忙しさのあまり、訪問看護師を使って検査だけで済ませてしまうことが起こりうる

7

指定避難所としての役割を担うために



8

非日常：指定避難所として医療系大学に必要な環境

- 東日本大震災をはじめ相継ぎ発生する大規模災害に的確に対応するための備えの重要性が増している。
 - 大規模で甚大な被害が想定される南海トラフ巨大災害の発生が想定される中で、自治体はこれまでの小中・高校等の施設を対象とする指定収容避難所に加え、より多くの指定避難場所の確保を進めており、大学もその例外ではない。
- こうした自治体の期待に応え、地域コミュニティに貢献する医療系大学に設置する指定避難所として、被災者の生活を的確に支えることができる機能の検討・整備が喫緊の課題となっている。
 - 被災経験を持つ神戸市長田区に立地する大学として、コミュニティのニーズに合った避難所環境について検討を行うことが必要

9

避難所の量的増に加え、避難所の環境向上へ (災害対策基本法の改正〔2013.6〕)

- 避難所の環境設定の必要性
 - 避難所の生活環境に関する課題指摘への対応が必要
 - 「トイレ」等の生活環境面での質の向上
 - 災害時、避難所のトイレ空間の快適さが失われ、健康被害へつながるケースがある(内閣官房「暮らしの質」向上検討会提言：2015.5)
 - プライバシーの確保、冷房機器、入浴等の生活環境に迅速に対応しているとはいえない(2014.8 広島土砂災害での指摘)
 - 「女性」「要配慮者」(高齢者、障害者、乳幼児その他の特に配慮を要する者)等の観点の不十分
 - 内閣府(防災担当)(2015.5.26)
- 2014年広島土砂災害での報道から
 - 被害が大きい安佐南区八木地区の市立梅林小学校には、最多の620人が避難する。住民は体育館や教室の床に、配布された薄いシートを敷き、扇風機で暑さをしのぐ。プライバシーを確保できるついでなどはない。夫(58)とともに21日から避難していた自営業の女性(58)は「猛暑の中、入浴できないのがつらい」とこぼす。利用できるシャワーは男女兼用の一つだけ。女性は23日夕、やむを得ず水道が使える避難勧告区域の自宅に戻った。「土砂崩れが再び起きるリスクは承知しているが……」と話した。(日経新聞8/24)

10

看護の視点からの避難所生活の検討

- 生活を整える環境を整えることは、健康の維持にとって重要
 - 「衣」「食」「住」のそれぞれの質を整えるための検討が必要

・ 内閣府「避難所における良好な生活環境の確保に関する検討会報告書」(2013.3)

	内閣府指針(2013.3)	ナインチンゲール「看護覚え書き」から
衣	- 高齢者・乳幼児・女性等に配慮した必需品の提供 - 衛生面に配慮した着替え用の衣類、洗濯機会の確保	排泄物がたつぷりと浸み込んだ衣類を病人に着せたままにしておくと、健康のための自然の作用を妨害している。清拭され乾いた後で病人が示す安心感と心地よさは、生命力を抑圧していた何かが除去されたしるしに違いない。
食	- 避難生活に不可欠な食糧・飲料水の提供 - メニューの多様化、栄養バランスへの配慮	食べるものにおける健康人と病人の違い、病気による違い、個人特有な嗜好や心理的な面まで気を付ける必要がある。
住	- 衛生面の対策、寒暖対策(毛布の配布等)、必要不可欠な生活環境(簡易トイレ等)の提供 - マット、畳、簡易ベッド、シャワー等の設置や相談窓口の設置	清浄な空気、清浄な水、効率の良い排水、清潔、光の5項目が住まいの衛生を保証する。新鮮な空気を愛するすべての者にとって厄介者であるほこりを換気し除去する。植物が常に光に向かっていくのと同じように、ほとんどすべての患者が彼らの顔を光に向けて臥している。

「生活を整える」視点から質的な検討

- コミュニティの住民(災害時の利用者)の声を踏まえた検討
 - 避難所の運営に住民も参画 → 日常からともに考える必要性

11

目的

- 神戸常盤大学は2013年4月に神戸市と協定を結び指定避難所としての役割を担うこととなった。
- 南海トラフ巨大災害の備えの充実が求められているなかで、専門職を育成する神戸常盤大学が持つ知の蓄積を生かして、被災者への対応を行えるように、指定避難所として備えるべき機能の充実・強化のために検討を行う。
- その手始めとして、超急性期から急性期に至る数日間を乗り越えるために、被災者の目線から避難所が持つ環境に関する課題を明らかにする

12

研究方法①

（対象）

- － 阪神・淡路大震災の被災地に立地する神戸常盤大学周辺の地域コミュニティに居住する住民

（期間）

- － 2013年10月～2014年5月

（データ収集の方法）

- － A大学が地域住民に大学を開放して開催する「健康フェア」の機会を利用
- － 体育館に段ボールで仕切った居住スペースを設営
- － 被災者に必要な非常食と避難所で役立つ物品等を揃え、模擬避難所を設置
- － 訪れた地域住民に模擬避難所を体感してもらい、①避難所の環境設定上の課題と、②医療系大学が設置する避難所に望むこと等について質問紙調査を実施

13

研究方法②

（分析方法）

- － 得られたデータは個人が特的できないようにした上で分析した。
（質的記述的因子探索型研究）

（倫理的配慮）

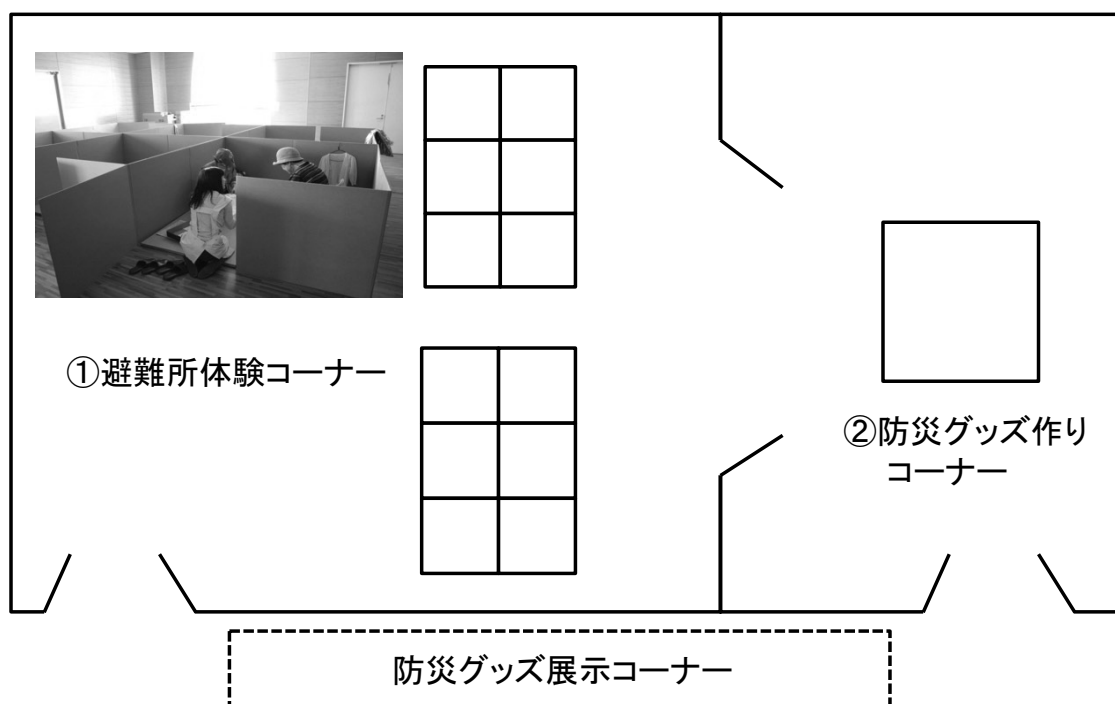
- － 本研究の実施に当たっては、神戸常盤大学研究倫理委員会の承認を受けた。

14

模擬避難所の全体図

(災害時の避難所に設定されている体育館)

20区画を設定、体育館の一部(面積約2,000㎡)を使用



15

①避難所体験コーナー

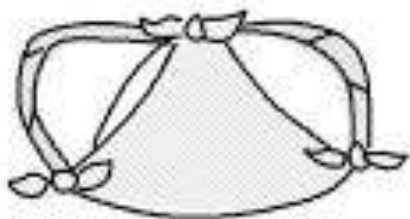
- 2人分のスペースを想定して1区画を設置
 - 縦2m×横2m, 間仕切りの高さ0.9m 避難所生活用簡易間仕切り+暖ボール畳(ダンボール厚0.8cm)
 - アルミ箔のブランケット
 - 段ボールの机
 - 非常食
 - ハンガー
 - 新聞
 - エアマットレス(一部)



16

②防災グッズ作りコーナー

- 風呂敷リュック



- 新聞紙で作った紙スリッパ



- 住民と一緒に防災グッズを作る



17

③防災グッズ展示コーナー

- 災害時に役立つグッズを展示



18

データ収集の様子



段ボールで設営した区画の中で阪神・淡路大震災の被災経験を思い出す高齢者



聞き取りを担当した学生に身振り手振りで語る高齢者、学生は傾聴



被災経験を思い出し、回答してくれた高齢者夫婦、学生は身を乗り出し



防災グッズと解説に見入る参加者

19

結果①

- 80名の来訪者の方々に研究への協力を頂いた
 - 回答者のうち災害経験者は55名(68.8%)と高い割合を占めた
 - いずれも阪神・淡路大震災を経験している
 - 避難所経験者は21名(26.3%)と研究協力者の約1/4を占めた
 - いずれも阪神・淡路大震災当時は概ね20歳代以上の者
 - 年齢の平均は55歳
 - 阪神・淡路大震災当時概ね20歳代以上の者が66名(82.5%)

結果②

- 避難所経験者は、自らの経験を通して、避難所の環境に関する課題を次のように指摘している
 - 『住』に関しては、「トイレの数と臭い」、「仕切りもなくプライバシーがない」、「人間関係で気を遣う」、「狭い」、「寒さをしのぐことが難しい」
 - 『衣』に関しては、「着替えができない」
 - 『食』に関しては、「水が届くのが遅い」「食事が同じものばかり」
 - 『清潔』に関しては、「風呂に入れない」
 - 『その他』では、「情報が入らない」等
- こうした課題は、仮設避難所で解消されているのだろうか

21

結果③

避難所の環境設定上の課題

	良いと感じた点	課題と感じた点
住	☐ 居住部分となる段ボールで仕切った居住スペースの快適さ ☐ 阪神・淡路大震災時に比べ向上したプライバシーを守る工夫 ☐ 個々の被災者のスペースを確保できることは狭くても大切 ☐ 避難先になった高校よりも広く感じた ☐ ダンボールの床の暖かさがわかった	☐ 長期間の避難には世帯人員に比べてスペースが狭い ☐ 段ボールでは床が固く長時間座れない ☐ 段ボールの耐久性への不安 ☐ 長期間は無理だと感じた ☐ 暑い夏には室温管理が難しそう ☐ 子どもの声が気になる ☐ 光がない ☐ 時間がわからなくなりそう
衣	☐ 暖を取るためのアルミ箔のブランケットの軽さ・有用性	☐ アルミ箔のブランケットのすれる音が気になる
食	☐ パンなどの非常食のおいしさ	-

22

結果④

医療系の大学に設置される避難所への期待

- 要配慮者への医療 & ケアの提供環境の整備
 - － 生活習慣病を抱える被災者の健康管理や健康相談の実施
 - － 簡易的な治療ができる設備の整備
 - － 被災者への話し相手などによる心のケア
 - － 自閉症を持つ者等への個別性の高い専門的なケアの提供
- 平常時からの安全・安心な施設環境の整備
 - － 学内の施設のユニバーサル化の推進
- 既存の施設環境を活かす役割取り
 - － 福祉避難所として位置づける

23

考察①

- 避難所マニュアルでは備えるべき最低の機能が示されている。
 - － そうした機能を実現するための様々な道具や、提供される食の質が改善されていることが評価される一方で、
 - ・ 自らの震災経験などを踏まえて、長期にわたり滞在を余儀なくされる被災者としての生活上の課題が指摘され、環境を整える難しさが浮かび上がった。
 - － 避難所経験者からはブランケットに見られるように良い点と悪い点の両面をいずれも具体的に指摘する傾向がやや多く見られた
 - － 一方で、避難所経験を持たない者はその空間環境に驚いたり、プライバシーが守れるか等の不安、テレビで見る避難所との比較などをすることが傾向として見受けられた。

24

考察②

- 阪神・淡路大震災の経験を持つ被災地に寄り添い、いのちに関する専門職の育成をめざす大学として、知の蓄積を活かし設置する避難所の環境設定の視点と大学への期待について示唆深い意見を得ることができた。
 - 避難所経験者は、ナインチンゲールが「人間に備わっている自然治癒力に働きかける」環境の整備の視点としてあげる「換気と暖房」「音」等、従来のマニュアルには十分に記載されていない点に触れている
 - 「住居の衛生」「小管理」「変化」「ベッドと寝具類」「部屋と壁の清潔」等の視点を避難所の環境整備についても考慮の対象にすべき
 - 仮の避難場所であるにしても長期化することが想定される中で、高齢者等の要配慮者の増加も踏まえ、より環境面に配慮した対応が求められる
 - ただ、病院のように24時間の体制が無いだけに、発災直後の対応は難しい。交通途絶などを想定し、平時から地域コミュニティが連携してセルフケア能力とセルフケアサポート力を高めることが重要²⁵

考察③

- 福祉避難所との一体的運営の必要性
 - 住民のセルフケアサポート力を生かす避難所の運営方針が重要。そのため、平常時から次のようなことを備えることが大切
 - ① 住民自身がまず自らの健康状態をアセスメントできる力をつける
 - ② 他者の健康状態をサポートできる基礎的な知識や介護力を発揮できるように個々のセルフケアサポート力の育成を支援する
 - ③ 専門職種とある程度の共通言語を持つこと等を通して、集団としての“セルフケア能力”を発揮できる力を高める
 - また、神戸市内で初めて本学が指定避難所に加えて福祉避難所として指定されたことを踏まえ
 - 同じ施設内にある指定避難所と福祉避難所との一体的運用のあり方を考えることが重要である。
 - 同じ施設内にあるということを強みにするための仕組みの検討が必要となり、このことが今後の要配慮者へのコミュニティケアのあり方に一つの方向性を示すことになるだろう

取組み成果の発展

- 研究成果をフィードバック(下左写真)
 - 住民の皆様に協力頂いた成果を、長田区消防署が主催する防災をテーマにするコミュニティの会議で、聞き取りを行った学生が報告
 - 指定避難所としての本学の位置づけと取組みを知って頂く
 - 避難所が設置された場合、運営に関わるキーパーソンに避難所の今と、地域住民が求める避難所像を情報提供(ともにつくる避難所へ)
- アクティブ・ラーニングへの発展可能性
 - 大学での災害看護の講義・演習から、地域に学ぶプログラムへの展開の可能性を確認 → 災害時には何をすべきかの意識を醸成
 - 神戸常盤大学が「地域の皆さんのための避難所」になるとはどういうことなのかをこの機会を通して考えてみたい」(学生の声から)
- 新たな位置づけへの展開(下右写真)
 - 神戸市から福祉避難所としての協定締結(2015年5月)



27

福祉避難所としての役割を担うために

福祉避難所の検討に向けて【試案】

- 「福祉避難所」とは一般に次のことをさす
 - 要支援者のために特別の配慮がなされた避難所
 - 福祉避難所とは、既存の建物を活用し、介護の必要な高齢者や障害者など一般の避難所では生活に支障を来す人に対して、ケアが行われるほか、要援護者に配慮したポータブルトイレ、手すりや仮設スロープなどバリアフリー化が図られた避難所（厚生労働省HPより）
 - 災害救助法が適用された場合において、都道府県またはその委任を受けた市町村が設置
 - 概ね10人の要援護者に1人の生活相談員（要援護者に対して生活支援・心のケア・相談等を行う上で専門的な知識を有する者）等の配置
 - 要援護者に配慮したポータブルトイレ、手すり、仮設スロープ、情報伝達機器等の器物、日常生活上の支援をおこなうために必要な紙おむつ、ストーマ装具等の消耗機材の整備が必要
 - 神戸常盤大学はどのような福祉避難所を目指すのか

29

福祉避難所の検討に向けて【試案】

- 実践的な訓練を通して課題を抽出することが必要
 - 対象の明確化が不可欠
 - ”幼児から高齢者まで、また健常者から病者までさまざまな人の「いのち」を心身両面から支える”としても、すべての者を対象者とすることは難しい
 - 大学が福祉避難所になっている事例はほとんどなく、神戸市との協定書の中では「対象者像」は明記されていない
 - いのちを支える専門職としての活動に協力できる体制の整備
 - その他、施設の提供と対象者の抽出に専門職の派遣が求められている（可能な範囲で）
 - 大規模災害時にどのように行動するべきかの検討と備えが必要
 - 訓練を通して共有できるイメージ、共通言語をつくる必要
 - 大学の資源（人員（学生を含む）・施設・資材等）を有効に活用しながら、神戸市区役所・保健所・消防・地元自治会と協働した簡易な模擬訓練が必要ではないか

30

福祉避難所の検討に向けて【試案】

検討すべき主な課題

- ① 災害時に受け入れる対象の明確化(協定では、災害時に神戸市が要援護者を「何らかの特別な配慮」と規定されるに留まっている)
- ② 本学が受け入れ可能な者を「どこで」「どのように」受け入れるか施設活用についての検討
- ③ 要援護者に対する日常生活上の支援(相談等を含む)スタッフの選考と育成(学生を含む)
- ④ 対象者を支援するために必要な人材(災害時に神戸市が行う対象者の抽出に協力する専門家の選考)、必要な資材の明確化とその必要な備蓄量の検討(費用に関する検討も含む)
- ⑤ 訓練の企画・運営・評価方法等(学生については平時からの学修を含めて)
- ⑥ 神戸市や関係機関との連携体制の構築
- ⑦ 福祉避難所の閉鎖と大学講義の再開手順 等

31

今後の展開のために

- 大規模災害が発生したら、神戸常盤大学は「一般の避難所」と「福祉避難所」に「場」と「人」と「資材」を提供することになる
 - その「場」には「健康が揺らぎやすい人」と「実際に健康が揺らいでいる人」が居る
 - POCTは健康の揺らぎを見える化し、必要な対処につなぐツールであり、避難所での活用可能性が高い
 - 訓練等により、具体的な効果性のイメージを出し、関係者で共有することが大切、実際に使う経験も貴重
 - 避難所の環境を良好に整備できれば、健康が揺らぐ者の増加を抑制につながることが期待される
 - 「なんらかの特別な配慮」が必要な対象を明確にし、対象を中心にユニバーサルな環境を整えることが必要

32



評価委員による評価

平成 28 年 3 月 11 日 AM10:00～

	評価項目 ※1	審査結果 ※2
a	研究組織（研究プロジェクト遂行のための責任体制の明確化、研究者間・研究チーム間の調整・連携の状況、研究支援体制等）	Ⓐ ・ B ・ C
b	研究施設等（研究施設の整備状況、プロジェクトに適合した装置設備の整備、装置・設備の利用状況（利用時間数を含む。）、外部の研究資金の導入状況等）	Ⓐ ・ B ・ C
c	研究の進捗状況・研究成果等（研究計画の達成状況、これまでの研究成果等）	Ⓐ ・ B ・ C
d	総合評価	Ⓐ ・ B ・ C

○自由記述○ ※3

- ・医療検査学、看護学、教育学等の研究者や医師が参画し、研究代表者の指揮のもと、効果的に研究を推進した点は評価できる。
- ・研究成果を国内外で様々な形で公表し高い評価を得ていること、そして、神戸市内の大学初の「福祉避難所」に指定されたことは大いに評価できる。
- ・今後は、報告書に記載されているように、神戸常盤モデルが日常的に運用できる仕組みの構築、つまり、今回の研究成果を実用段階に発展させることが課題である。
- ・特に被災者の場合、肉体の健康管理以上に精神の健康管理が重要である。メンタルヘルスマネジメント機能も具備したサポートシステムの実現に向けた研究を期待する。

1. 本様式は、3月11日の評価委員会終了時にご記入いただき、提出いただきます。
2. 評価委員会では、同封の(参考資料2)平成25年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」研究成果報告書概要に記載しきれなかった各学科の取組内容やその成果について約1時間程度のプレゼンをさせていただきます。事前に同封の(参考資料2)に基づき評価をいただき、当日のプレゼンを聞いて修正いただく形でご記入いただければと思います。

注1：評価項目は、平成22年4月6日私立大学戦略的研究基盤形成支援検討会決定の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価についての評価項目と審査結果を採用しています。

注2：審査結果A（優れた研究成果を上げている）、B（研究成果は上がっている。）、C（あまり研究成果が上がっていない。）

注3：今後の当該大学における研究推進上の留意点や特に評価すべき点について助言のためのコメントをお願いします。

評価委員による評価

平成 28 年 3 月 11 日 AM10:00～

	評価項目 ※1	審査結果 ※2
a	研究組織（研究プロジェクト遂行のための責任体制の明確化、研究者間・研究チーム間の調整・連携の状況、研究支援体制等）	Ⓐ ・ B ・ C
b	研究施設等（研究施設の整備状況、プロジェクトに適合した装置設備の整備、装置・設備の利用状況（利用時間数を含む。）、外部の研究資金の導入状況等）	A ・ Ⓑ ・ C
c	研究の進捗状況・研究成果等（研究計画の達成状況、これまでの研究成果等）	Ⓐ ・ B ・ C
d	総合評価	Ⓐ ・ B ・ C

○自由記述○ ※3

1. 本様式は、3 月 11 日の評価委員会終了時にご記入いただき、提出いただきます。
2. 評価委員会では、同封の（参考資料 2）平成 25 年度～平成 27 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」研究成果報告書概要に記載しなかった各学科の取組内容やその成果について約 1 時間程度のプレゼンをさせていただきます。事前に同封の（参考資料 2）に基づき評価をいただき、当日のプレゼンを聞いて修正いただく形でご記入いただければと思います。

注 1：評価項目は、平成 22 年 4 月 6 日私立大学戦略的研究基盤形成支援検討会決定の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価についての評価項目と審査結果を採用しています。

注 2：審査結果 A（優れた研究成果を上げている）、B（研究成果は上がっている。）、C（あまり研究成果が上がっていない。）

注 3：今後の当該大学における研究推進上の留意点や特に評価すべき点について助言のためのコメントをお願いします。

自由記述

平時から健康管理を通じた地域医療の補完的役割を目指すことは、災害時には大きな効果が持たれる。日頃からの地域との関わりが、危機管理において大切なこと。

○ 大学の特色(看護学科・医療検査学科・こども教育学科)を活かし、心と身体を全体的にサポートするという目的・意義はその通りであると思う。

学生と地域との繋がりを強めていけば災害時での大きな力になるであろう。
また、行政との強い協力体制も必要か。

高齢者だけでなく、保護者・子どもを対象にしていることが、「福祉避難所」の指定に繋がったのではないか。

○ 「福祉避難所」としての具体的な対応(災害時・避難所経営時等)を示していくことも必要か。広報活動も含める。

この活動、成果を拡げていく努力も必要であり、関わりを持ちたいという学生を増やしていくことも大切。災害時には自らの判断で行動しなければならない場面が出てくる。

保護者や子どもを対象とした、防災教育、減災教育は進めていくべき。

評価委員による評価

平成 28 年 3 月 11 日 AM10:00～

	評価項目 ※1	審査結果 ※2
a	研究組織（研究プロジェクト遂行のための責任体制の明確化、研究者間・研究チーム間の調整・連携の状況、研究支援体制等）	(A) ・ B ・ C
b	研究施設等（研究施設の整備状況、プロジェクトに適合した装置設備の整備、装置・設備の利用状況（利用時間数を含む。）、外部の研究資金の導入状況等）	(A) ・ B ・ C
c	研究の進捗状況・研究成果等（研究計画の達成状況、これまでの研究成果等）	(A) ・ B ・ C
d	総合評価	(A) ・ B ・ C

○自由記述○ ※3

者陣型災害の最初である阪神・淡路大震災が地域の避難所とも
 (理)にあり、また神戸常盤大学における「災害対応する組み込み機械的
 サポートシステム」は、21年の時点で「これからは、半自動化の白と考える。
 時間の中で重ねて経験は、大まかな予測や反省や新しい目標や
 知恵を生み出す。その中から「モデル」として理解し、それを共有し、その形を
 組み直してITシステム。そしてこれを神戸常盤大学の「指針」としてうけとめる。
 これはIT化と考える。そのための思いを「大学を育てるITシステム」。
 (災害は日常の中の事象とらえる)

1. 本様式は、3月11日の評価委員会終了時にご記入いただき、提出いただきます。
2. 評価委員会では、同封の(参考資料2)平成25年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」研究成果報告書概要に記載しきれなかった各学科の取組内容やその成果について約1時間程度のプレゼンをさせていただきます。事前に同封の(参考資料2)に基づき評価をいただき、当日のプレゼンを聞いて修正いただく形でご記入いただければと思います。

注1：評価項目は、平成22年4月6日私立大学戦略的研究基盤形成支援検討会決定の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価についての評価項目と審査結果を採用しています。

注2：審査結果A（優れた研究成果を上げている）、B（研究成果は上がっている。）、C（あまり研究成果が上がっていない。）

注3：今後の当該大学における研究推進上の留意点や特に評価すべき点について助言のためのコメントをお願いします。

以上

評価委員による評価

平成 28 年 3 月 11 日 AM10:00～

	評価項目 ※1	審査結果 ※2
a	研究組織（研究プロジェクト遂行のための責任体制の明確化、研究者間・研究チーム間の調整・連携の状況、研究支援体制等）	Ⓐ ・ B ・ C
b	研究施設等（研究施設の整備状況、プロジェクトに適合した装置設備の整備、装置・設備の利用状況（利用時間数を含む。）、外部の研究資金の導入状況等）	Ⓐ ・ B ・ C
c	研究の進捗状況・研究成果等（研究計画の達成状況、これまでの研究成果等）	Ⓐ ・ B ・ C
d	総合評価	Ⓐ ・ B ・ C

○自由記述○ ※3

各分野の研究成果を結びつけて研究の深化を期待します。
 各分野の研究は、~~他の分野~~^{創発的} 連携所への促進策、10の分野の1分野
 を担う重要な成果であり、行政の支援対策、平時の他機関管理の中に
 位置付けて、トータル支援につなげることを期待しています。

1. 本様式は、3月11日の評価委員会終了時にご記入いただき、提出いただきます。
2. 評価委員会では、同封の(参考資料2)平成25年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」研究成果報告書概要に記載しきれなかった各学科の取組内容やその成果について約1時間程度のプレゼンをさせていただきます。事前に同封の(参考資料2)に基づき評価をいただき、当日のプレゼンを聞いて修正いただく形でご記入いただければと思います。

注1：評価項目は、平成22年4月6日私立大学戦略的研究基盤形成支援検討会決定の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に係る事後評価についての評価項目と審査結果を採用しています。

注2：審査結果A（優れた研究成果を上げている）、B（研究成果は上がっている。）、C（あまり研究成果が上がっていない。）

注3：今後の当該大学における研究推進上の留意点や特に評価すべき点について助言のためのコメントをお願いします。

以上